

## 建設経済委員会先進地視察報告

### 日程・視察先・目的

- 令和7年10月8日 広島県尾道市：しまなみ海道でのサイクルツーリズムについて  
10月9日 広島県竹原市：一般社団法人竹原観光まちづくり機構について  
歴史的建造物の活用について

#### 1 広島県尾道市：しまなみ海道でのサイクルツーリズムについて

尾道市（広島県）は人口約13.1万人、面積約285km<sup>2</sup>で、しまなみ海道や映画の舞台として知られる観光都市である。造船や農業も盛んで、猫のまちとしても人気がある。知多市と比較すると、尾道市は広域かつ観光資源が豊富で、文化的魅力に富んでいる点が特筆される。

今回は、尾道市役所にて、しまなみ海道でのサイクルツーリズムについて説明を受ける形で視察した。

##### (1) 事業の概要

しまなみ海道は、広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶ全長約70kmのサイクリングロードで、日本初の海峡横断自転車道として整備された。尾道市では観光振興の一環として、以下の取組を実施している。

- ア レンタサイクルの充実：尾道駅前や各島にターミナルを設置し、乗り捨て可能な仕組みを導入
- イ ブルーライン整備：推奨ルートに青いラインと距離表示を設け、初心者にも配慮
- ウ サイクルオアシスの設置：トイレ、空気入れ、観光パンフレット等を備えた休憩所を整備
- エ レスキューサービス：「島走レスキュー」により自転車トラブルに対応
- オ しまなみ自転車旅の宿：自転車保管や荷物発送対応など、38施設が登録（令和7年4月現在）
- カ ONOMI CHI U2：県営倉庫をリノベーションし、ホテル、飲食店、自転車ショップ等を備えた複合施設として整備

##### (2) 事業の実績および評価

尾道市は、平成11年にレンタサイクル事業を開始し、平成29年度には約15万台の利用実績を記録するなど、着実に利用者数を伸ばしてきた。平成26年にはしまなみ海道の自転車通行料を無償化し、費用は協賛企業からの支援金や自動販売機収益によって補填する仕組みを構築した。これにより、利用者の心理的ハードルが下がり、観光客の増加につながった。

平成30年度にはサイクリング客数が約33万人に達し、令和6年度には外国人利用者が全体の40.3%を占めるまでに拡大した。特にアメリカ、オーストラリア、台湾からの来訪が目立ち、インバウンド需要の高まりが顕著である。外国人観光客に対しては、日本の交通ルールを記載したサイクリングマップを配布するなど、文化的背景の違いへの対応も進められている。

また、官民連携による施設整備や情報発信が功を奏し、ONOMI CHI U2をはじめとする拠点施設の整備により、国内外からの誘客に成功している。これらの取組は、地域資源を活かした観光振興の好事例として高く評価できる。

##### (3) 課題および今後の展開

観光客の増加に伴い、交通ルールの遵守やマナーの問題が顕在化しており、特に外国人観光客への啓発が課題となっている。文化的背景の違いに配慮した情報提供や教育的取組が求められている。

また、ヴィーガンやベジタリアンなど、多様な食文化への対応も今後のインバウンド施策として重

要であり、観光客のニーズに応える柔軟な受入れ体制の整備が必要とされている。

自転車通行料の無償化や施設整備に伴う財政的負担も大きく、持続可能な運営体制の構築が課題である。人的資源の確保・育成も含め、観光振興を支える基盤づくりが求められる。

さらに、今治市との連携に加え、他自治体との広域連携を強化することで、しまなみ海道を起点とした広域観光の展開が期待されている。

#### (4) 所感

今回の視察を通じて、尾道市がしまなみ海道を核とした観光振興において、官民連携と広域連携を巧みに活用し、国内外からの誘客に成功している様子を実感した。しまなみ海道は、単なるサイクリングロードではなく、「海峡を自転車で渡れる」という世界的にも希少な体験価値を提供しており、観光資源のブランド化に成功した好例である。

特に印象的だったことは、尾道市長自らがサイクリングで他市まで出向き、自治体間の連携強化に努めている点である。広島県と愛媛県、尾道市と今治市が一体となって整備したブルーラインやサイクルオアシスは、視認性・安全性・快適性の面で優れており、サイクリストにとって非常に魅力的な環境が整っている。通行料の無償化や外国人向けの交通ルールマップの配布など、利用者目線の工夫も随所に見られた。

また、ONOMICHI U2の取組は、行政がハード（箱モノ）を整備し、民間がソフト（中身）を担うという理想的な官民連携の形であり、知多市のまちづくりにも応用可能なヒントを多く含んでいた。地元事業者が郷土愛を持って参画している様子や、自転車のブランドショップの誘致など、地域ブランドと民間資源の融合が見事に機能していた。

知多市においても、佐布里緑と花のふれあい公園や七曲公園、旭公園、金沢IC（仮称）周辺の道の駅整備などにおいて、知名度の高いアウトドアブランドとの連携を図ることで、目的地型観光施設としての魅力を高める可能性がある。また、「マチテラス日進」のような市民も訪れたいくなる施設づくりを目指すべきであり、観光振興は市外誘客だけでなく、市内回遊性の向上にも資するべきであると感じた。

さらに、尾道市がしまなみ海道だけでなく、島根県と連携した「やまなみ街道」も整備している点は、地理的優位性を活かした広域観光の展開として非常に参考になった。知多市においても、知多半島西海岸を活かしたサイクリングルート整備や、南知多町などとの連携による広域観光の可能性を探るべきである。

今回の視察は、観光資源の磨き上げと発信力の強化、そして行政の積極的な関与の重要性を再認識する機会となった。尾道市のように、地域の魅力を最大限に引き出し、戦略的に発信することで、観光は地域経済の柱となり得ることを実感した。地域資源を生かした観光振興に向けて、今後の施策に生かしていきたい。

## 2 広島県竹原市：一般社団法人竹原観光まちづくり機構について

### 歴史的建造物の活用について

竹原市は広島県南部に位置する人口約2.2万人のまちで、製造業を主産業としており、町並み保存地区や大久野島などが観光資源として知られる。NHKの連続テレビ小説「マッサン」の舞台となった町並み保存地区が有名で、ウサギの島として知られる大久野島も人気である。製造業では食品加工や化学製品などが地域経済を支えている。

今回は、竹原市の職員及び一般社団法人竹原観光まちづくり機構から町並み保存の在り方について説明を受け、その後実際に道の駅を中心に町を散策し、視察を行った。

#### (1) 事業の概要

広島県竹原市は、瀬戸内海に面した人口約2.2万人のまちで、製塩業や酒造業で栄えた歴史を持っている。市内には国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された町並みが残り、「安芸の小京都」と称される風情ある景観が観光資源となっている。令和4年には、地域資源を活かした持続可能な観光まちづくりを目的に、一般社団法人竹原観光まちづくり機構（DMO）が設立され、市・観光協会・商工会議所・地域住民・事業者が連携して観光施策を推進している。観光ロゴ「The Salt of Life」には「生きがい」や「人生の刺激」といった意味が込められ、地域の魅力を発信する旗振り役として機能している。

#### (2) 事業の実績および評価

竹原市では、町並み保存地区の景観整備として無電柱化や美装化舗装、軒下配線によるセットバックなどが施され、歴史的景観と現代的整備が調和している。令和7年2月には「第29回ふるさとイベント大賞」にて優秀賞を受賞するなど、観光施策の成果が評価されている。特に大久野島は、戦時中の毒ガス製造の歴史を持ちながら、現在は「うさぎ島」として国内外から注目を集めており、令和6年には前年比162.6%増の21,113人の観光客を記録している。また、女子大生によるツアーガイドなど若者の参画も進んでいる。さらに、移住・定住促進のための相談員配置や空き家対策も進められており、観光と地域活性化の両立を図る取組が展開されている。

#### (3) 課題および今後の展開

竹原市は人口減少と高齢化が進む「消滅可能性自治体」とされており、観光振興による地域活性化が急務である。DMOの設立は戦略的な一歩であるが、設立から日が浅く、既存の観光協会や商工会議所との役割分担や連携の整理が課題となっている。また、観光協会の窓口が分散しており、市民や観光客にとって分かりづらい印象があることから、窓口の一本化が求められている。公共下水の未整備などインフラ面の課題も残されており、持続可能な観光地づくりには継続的な投資が不可欠である。

#### (4) 所感

竹原市への視察を通じて、知多市との共通点と相違点を実感することができた。両市は歴史的な町並みの保存と活用に力を入れており、知多市の岡田地区では知多木綿の歴史を活かした街並み保存が進められている。一方、竹原市は「安芸の小京都」として国の保存地区に指定され、重厚な町並みが観光の中心となっている。

体験型観光の充実も共通しており、知多市では手織り体験や宿泊体験、竹原市では竹細工体験などが展開されているが、知多市では体験型アクティビティの確立が課題であり、竹原市の取組は参考になる。

季節ごとのイベントも両市の魅力を高めている。知多市では梅まつりや桜まつり、竹原市では「憧憬の路～町並み竹灯り～」など幻想的なイベントが開催されており、地域性の近さを感じた。自然環境に

おいても両市は海に面し、知多市では新舞子での海水浴、竹原市では大久野島での自然体験が可能である。

アクセス面においても共通点があり、知多市は名古屋や中部国際空港からの利便性が高く、竹原市は広島空港やJR呉線からのアクセスが整っている。竹原市は映画の舞台や著名人の出身地としても知られ、観光地としての存在感を放っている。

視察では、駅前の寂しさとスタイリッシュなホテルの対比が印象的であり、「なぜ知多市にはこうしたホテルがないのか」という疑問が生まれた。ホテルがあれば観光客が来る、訪日外国人の姿も見られるという現実を目の当たりにし、知多市の観光インフラ整備の必要性を再認識した。

竹原観光まちづくり機構の取組は、観光資源の少なさを逆手に取り、KPIやKGIを活用し、PFIや補助金を組み合わせて戦略的に展開されていた。竹原市の観光に対する「必死さ」が感じられ、率直に敬意を表したい。しかしながら、DMOの設立は素晴らしいものの、市民目線ではやや複雑であり、窓口の一本化が望まれるようにも感じた。

竹原市の取組は、歴史・文化・自然・体験・季節感をバランスよく取り入れた観光戦略であり、持続可能な観光のモデルとして知多市の施策に取り入れるべき点が多い。平和教育や若者の参画、インフラ整備など、竹原市の姿勢は知多市にとって多くの示唆を与えてくれた。今後は、市民とともに考える観光施策の構築を検討していきたい。